

## 雫に濁る物語 一冊

阿部秋生・前田裕子

### 一、本書の来歴

本書は、山岸徳平博士の旧蔵書で、現在は本学の所有に帰し、山岸文庫として、本学図書館に収蔵されている。『雫に濁る物語』という名は、『風葉和歌集』巻九（哀傷）と巻十一（恋）とのそれぞれに、歌の作者名として、「しづくにこるの中納言」「しづくにこる贈皇后宮」とあることによって、鎌倉時代に存在していたことが知られ、また山岡浚明の『古ものがたり目録』（雫にぬれる中納言<sup>註一</sup>）、伴直方『物語書目備考』（しづくに濁るものかたり 同（風葉<sup>註二</sup>）、黒川春村『古物語類字鈔』（しづくにこる物語<sup>註三</sup>）、岡本保孝『物語書名寄』（しづくに濁る物語 風哀情）、横山由清『古物語名寄類韻』（しづくにぬるゝ風<sup>註四</sup>）、藤井貞幹『国朝書目』（△しづくに濁る）とそれぞれの目録にあるが、これらの目録の著者は、実際にこの物語をその目で見たわけではなく、『風葉和歌集』によって、その名を知って、目録に収めただけのことらしい。その意味では、『風葉和歌集』以後、その名は知られていたが、その存在を実際に確めた人はいなかったのかもしれない。

註一 「雫にぬれる中納言」「しづくにぬるゝ風」は不慮の誤記、又は『風葉和歌集』の異文であろうか。

註二 『古物語類字鈔』には、この物語名の次に、「風葉哀傷（しづくに濁の中納言）恋一（贈皇后宮）、按に古物語目録に、雫にぬれる中納言、とあるは、非なり。」とある。

右のようなことで、この物語は名のみ知られて散佚したものと考えられていた。それが再発見された経緯は次の通りである。

昭和三十八年六月「文学・語学」第二八号に、「ある逸名の物語とその本文」として山岸徳平博士が、一応の書誌と本文とを紹介されたのが最初で、当時既に山岸博士の所蔵に帰していたものであるが、山岸博士は、これが『風葉和歌集』にある「雫に濁る物語」であることには気づいておられなかった。お伽草子よりは古い擬古物語の一つとして、新資料を紹介されたものらしい。

この紹介を見た小木喬氏が、全体で九首あるこの新資料中の歌の一首、

まことにやむすびあはせし忍草などあやにくに露けかる覧

という中納言の歌が、『風葉和歌集』に「雫に濁る物語」の歌として、巻九、哀傷に、

贈皇后宮にうちとけすなからみなれ侍けるかかくれ給ひてのちのきのしのふをみてよめる

しづくにこるの中納言

695 まことには結びやはせししのふ草などあやにくに露けかるらん（校本風葉和歌集、一六二頁）

と、巻十一、恋一

たいしらす

797 つゝめとも袖のしからみせきわひぬ涙の川やうき名なかさむ（校本風葉和歌集、一七九頁）

しづくにこる贈皇后宮

とある二首の中の前者と、第一、二句に小異はあるが、同じ歌と考えられることを知り、とすればこの「逸名の物語」は、『風葉和歌集』にいう「しづくにこる」物語であるとして、この事実が山岸博士に報告され、同時に、当時改訂中の久松博士編『日本文学史』中世篇（改訂新版、昭和三十九年六月一日刊）に、この物語の存在が報告された（同文学史中世篇、一一〇頁）。小木氏は、その後、昭和四十二年五月三十一日、この原本を直接調査し、その結果を昭和四十四年六月の『国語と国文学』に発表した（『散逸物語の研究』（昭和48・2）に収められている）。

これと相前後したころと思われるが、中野幸一氏が、山岸博士所持の原本を調査して、『しづくにこる物語』考を発表した。『物語文学論攷』（昭和四十六年刊）に収録されているが、それによれば未発表原稿で、昭和三十八年の執筆とある。山岸博士による「逸名の物語」との紹介のあった直後のことである。

ここまでの来歴によって明らかのように、この物語の成立は『風葉和歌集』の成立した文永八年（一二七二）以前であることは判明するが、それ以上の詳細は不明である。作者も不明である。

『雫に濁る物語』という題名は、『古今和歌集』巻八、離別の紀貫之の歌、

しがの山ごえにていしゐのもとにて物いひける人の別れるをりによめる

つらゆき

404 むすぶ手のしづくににこる山の井のあかでも人に別れぬるかな  
によるといわれるが、その理由は判然としない。「あかでも人に別れぬるかな」という下の句が、この物語の主題と関するものであるか。

## 二、形態

本書は、縦一四・八糧、横一五・二糧の綴葉装の舂型本写本、全一冊である。

表紙は、茶褐色の緞子で、木の葉と蔓草の模様があり、端は擦りきれて地の紙が見えている、原装であろうかともいわれている。見返しは金銀の切箔散らしの料紙。裏表紙とその見返しも同様である。題簽、外題、内題はない。

料紙は薄手の鳥の子紙である。紙数は、前後に各一枚、計二枚の遊紙があり、これらを含めて三十六枚である。綴りは三帖である。第一帖は二枚四葉、その第一葉は、表紙裏打紙の下にはさみこまれ、第二葉が遊紙となり、第三、四葉の二枚が本文の墨付である。第二帖は一二枚の料紙を二つに折って二四葉が本文の墨付と一面分（第十八丁ウ）の空白とになっている。第三帖は、八枚の料紙を二つ折とし、本文墨付八葉、と遊紙一葉、残る七葉は裏表紙の裏打紙の下にはさみこまれている。従って本文墨付は、三四葉六七面となる。一面十一行、一行十五字前後、歌は、改行一字下げで、上句と下句とにわけて、二行に書く。歌は九首見える。

本文の最後の第三十五丁ウは、本文五行で終わった後、一行分ほどの空白をおいて、その次に、約二字下げで、

これを御らんせ<sup>む</sup>人は

念仏申させ給へし

かならずく

とある。物語の本文とは一応別のものかと思われる。

本文には、書き入れ、貼紙等はない。蔵書印かと思われるもの、第十八丁オ、本文七行の次の空白の右端に墨字の矩形のものがあのみである。

奥書、識語等はなく、極札もないが、第一丁（遊紙）の表の右に寄せて、縦一四糧、横六糧の貼紙があり、次のようにある。

近衛殿前久号龍山公極札添云佐藤□□教忠記之

誹書綾錦＝松永貞徳誹諧一道ノ宗匠を「龍山公より免許すと有九條玖山公山崎宗鑑」細川幽斎紹巴抔同時也龍山公和哥連誹之達人」世ニしる所也可賞誹書也と安部行貞申キ」凡享和頃迄貳百三十四拾年余成か」

「佐藤教忠」については未詳であるが、この貼紙が書かれた享和（一八〇一～四）ごろには、本書の筆者を近衛前久（天文五年～慶長十七年五月八日へ一五三六～一六二二）とする極札があつて、それに添えて前久について注記したものかといわれている（中野幸一氏説）。

近衛前久は、関白近衛種家の子として天文五年誕生、本名は晴嗣、天文十年六歳で従三位に叙せられ、天文二十三年には十九歳で関白、左大臣正二位で、氏長者になつた。天文二十四年には前嗣と改名、永祿三年九月二十五歳の時、長尾景虎（上杉謙信）を頼つて越後へ下向、同五年に帰京して、前久と改名した。永祿十一年（一五六八）三十三歳までは関白でいたが、この年（信長上洛の年）十一月（十二月とも）、「被<sub>レ</sub>違<sub>二</sub>武命<sub>一</sub>出<sub>レ</sub>奔」とある。出奔先は「丹州」とある。天正三年（一五七五）四十歳の六月一旦上洛したが、九月には薩摩へ下向した。天正五年二月には帰京し、関七月から出仕した。天正十年（一五八二）、四十七歳の二月、太政大臣に任ぜられたが、六月二日（本能寺の変のあつた日）落飾出家、龍山と号した。慶長十七年（一六二二）五月八日、七十七歳で薨じ、東求院と称する。

『綾錦』（菊岡沾源著、享保十七年へ一七三二刊）の上巻、「誹道大系譜」の中の松永貞徳の条の註に、

近衛殿下龍山公、九条殿下玖山公より法印玄旨法橋宗狼法眼紹巴等に仰有テ、誹諧一道ノ宗匠ヲ免許とある。貼紙はこの記事のことに言及しているものである。

なお、『補正和漢書畫古筆鑑定家印譜』によると、古筆鑑定家の了佐（一五七二～一六六二）について、

源姓江州西川人、平澤氏、初名彌四郎、薙髮ノ法名了佐、從<sub>テ</sub>近衛関白前久公<sub>一</sub>、古筆目利傳授、遂爲古筆鑑定家ノ祖、とある。前久は古筆にも関心をもち、その目利について見識をもっていたものらしい。

本書の筆蹟は、前久時代の人のものとは考えられない、かなり溯るもの、室町時代の初期、溯れば吉野時代のものといわれている。とすると、この遊紙の貼紙が近衛前久の名を掲げ、その人を紹介したのは、前久を本書の書写者としてではなく、むしろ鑑定家として紹介したのであつたかもしれない。古筆鑑定家の鑑定として掲げる個人名までを鵜呑みにすることはできないが、時代を大幅に間違えることは少い。室町時代初期又は吉野時代の筆蹟を安土・桃山時代の筆蹟と鑑定することは少い。龍山公を本書の筆者としたとは考えられないであろう。あるいは、龍山公前久が、本書の筆者、少くともその書写年代について一つの意見を提示し

ていたのかもしれないが、いずれにしても一つの推測にすぎない。

なお、本書の本文に関して、次のような異常な点が見える。

一、『風葉和歌集』によれば、その巻十一、恋一にある「つゝめども袖のしがらみ……」の歌が、本書の中に見えない。この歌の  
入る部分があつたはずである。

二、本書の冒頭が、「なかにもつゆばかりはつみゆるされぬべけれど……」とあつてこれが物語の書き出しの文とは考えられない。現在の書き出し以前の部分があつたことが考えられる。

三、本書は三つの綴りでできているが、その第一帖が極端に少く、今の本文墨付の前にあつた墨付の何葉かが入りうる形になっている。

四、本書第十八丁オは七行だけで終り、その後四行分の空白があり、その裏の第十八丁ウは白紙である。つづく第十九丁オ、ウと第二十丁オの四行、つまり「まことにやむすびあはせし忍草」という歌の前の部分は、この歌と結びつかない内容である。

以上のことから、本書には、脱落と錯簡とがあるものと考えざるをえない。現存本による限り、その錯簡を訂正、復原することは困難であらう。

以上、本書の来歴と形態のあらましを述べた。本書は、零本であり、かつ錯簡もあるが、『風葉和歌集』にいう『雫に濁る物語』の唯一の伝本である。鎌倉時代物語の物語史の空白部分を埋めるものとして貴重な資料であることに変わりはない。

本書については、次のような研究が発表されている。この解題を作るに当たってもさまざまの教示をえたことを深謝するものである。

中野幸一 『しづくににぐる物語』考（『物語文学論攷』昭和四十六年十月刊所収）

小木 喬 『しづくににぐる物語』考（『散逸物語の研究』平安鎌倉時代編、昭和四十八年二月刊所収）

〔白紙〕 (右寄りニ極札添書、貼付)

1才  
1ウ

なかにもつゆはかりはつみゆる

されぬへけれとひとへに

ひんなきもののにのみおほし

めすらんとこの御事に

つけてもはゝの御こといか

はかりかはおほしめしいつらん

と思やりまいらするもわか

つみさりがたく思つゝけて

ゐたまへり三ゐくれぬとい

そきたまへはないしのかみ

はあるかなきかの心ちにも

かくときゝたまへは心やす

くおほしすてさせたま

はさりけるもうれしなから

このよにはいまはいかてか

見たてまつるへきとおほ

すにもさるへくてこそ

かゝるうき身のはらにや

とりたまひけめ見たて

まつらんとおほしめし

て中納言かくれたまへはひま

に御そをしゝゝみあま

かつなにくれなとそゝのき

2才

あひたるにかたはらに

ふせたてまつるを見たて

まつりたまへはなにのあや

めも見ゆましきほとなれ

とたゝうゑの御かほゝうつし

とりたるやうなるを見給

もかきくらす心ちしては

かゝしくも見へたまはず

これ見きこゆるさい将<sup>註一</sup>のめ

のと中将なとはいまいまし<sup>註一</sup>く

ゆゝしくをもはしとをもへ

ともなみたのみそをつる

ありしまゝにてかゝる御

事のをはせましかはい

かはかりめてたからましと

思にも中納言とのそうらめ

しきあやつなとひたいに

かきたてまつるすゝりを

ひきよせてふてとるても

わなゝかしけれともすゝ

りのしたなるしろきうす

やうにものかきつけてし

とけなけにをしまきて

中将にさしとらせたま

へるをさなめりと心えて

3才

3ウ

うるはしくひきむすひ  
つゝみなとしてさい將の  
中將にうちゑまいらせよ  
とおほすにやとてたて  
まつるいかやうなる事  
ならんとかなしくあは  
れにおほす人々に御ゆ  
なとまいりよく御ゆなと  
まもりたてまつれなといひ  
をきてわか宮の御をくりに  
はへらんとそのたまふちある人の  
やむことなきなと車にくし  
たまえりくれぬへしとて  
宰相中將御車にいたきたてまつ  
りてのせまいらせ給つゝ御車  
ひきいつるなこりいみしく  
あはれなり内侍督はたゞ世ニ  
なからへんとさらにおほえね  
ゆをたにまいらすさはかりひ  
ころくつをれたまえるかざる  
たいしのわざをし給えるに  
おのつからいかはやとも心をもえて  
神仏をねんしたまはゞやあらん  
たゞふかくのみおほしいれは  
たのみすくなし中納言いとゞ

4 才』

いかに我をうしとおほすらむ  
とをしはからるいまざりとも  
たいらかにておはするのみう  
れしとおほすうちにはわか  
宮わたらせ給えりときかせ給  
にもはゞなからとおもはまし  
かはとそれにつけても御むね  
ふたからせ給てさい將の文  
まいらせ給えるをもゆめかと  
御心さはきして御らんすれは<sup>まで</sup>

おのかよゝひきわかれぬる竹のこの  
おひしふるねをそれとしらん  
君ならてあふせあらしとみつせかは  
しての山地へ思こそいれ

たゞよはけにとりのあとのやうに  
かゝれたるめてたかりしてとも  
見えぬにいかはかり思けるにか  
と御らんする御心地なのめならん  
やはせめて思あまりける心のうち  
をしらせまほしくてかきつらん  
心の程かなしさにとはかり御か  
ほにをしあてゝおはします御  
なみたはたきの水などのを  
つる心地をせさせたまふ宰相  
中將はおほつかなくこもちの事

5 才』

5 ウ』

おほしやれとわかみやの御こと

も。すてかたくてさふらひ給御

ゆとのゝきしきなとはたゝた

ちそひたまはすといふはかりこそ

あれ御つるうちれいのことな

れはきよけにさわりなきを

えりすくりて五位十人六位

十人御ゆとのゝくそくなのめならぬ

ことゝもなりなにも今上一

のみことかきつけられたるを

も給宰相かゝる人のをやとなり給

はかりの人の御すくせのなとかをな

しくはくもりなからさりけん

くちをしきことかきりなし

内侍督はたゝよはに心地なり

給にさすかあはれなる事おほく

めのとなと宰相中将をはしめて

いかにあはれにあえなくおほさんと

おもふをうちはしめさすか中納言

わか心をたかへしとちかくもよらす

心をつくしおほしあつかひつるも

いまはさりとともとおほしたりつる

もあはれけにいきたらはさのみも

いかゝしたかはざらんとおもふ心う

さまたなひきにけりとうちの

6 才

きかせ給はんはつかしきなどにも

中／＼なからんのみそよからめとふかく

おほしとりてたゝをなしき

さまにのみおはす中納言はかたわ

らにのみそひふしてわか宮なと

をみ給しにもいとゝいかににく

しとおほすらんとをしはかり

給にもことはりの程思しられ

侍れはそれもさるべきことゝ

おほしなせむかしよりさるふ

しなきにしも侍らすざり

とも月ころをこかましくし

れ／＼しきおもふ人も侍らむ

それもさも侍れ御心にたにあは

れとおほさばと思ねんしつる

心の程はをくのえひすなりとも

あはれはしるなるものをいま

たにすこしよのつねにてみえ

させたまえそのみそ日ころの

心おほししりけりとも思侍ら

んなときこえたまふにけ

にいかにあえなくおほさんとあ

りかたかりしをりの御心もい

きならねはおほししられて

日ころもあまりくるしくても

6 ウ

7 才

7 ウ

8 才



一ことはもをたにもきこえさり  
つるもむけに思いてなくおほさん  
とあはれなれはいまこのよもと  
おほせはくるしきをねんして  
かほひきいれなから御ころの  
ほとはありかたくうれしく思  
しらぬにはあらねとこの世になから  
へて待ましき契にや日ころも  
いま／＼と思侍しにけふまでもいかて  
侍けるにか御心さしのほとをもむ  
けにこの世にてはしらぬさまにてやみ  
はへりぬなときこえ給御こゑも  
たへ／＼になりゆくあやしくて  
御そをひきあけて御かほをみれば  
しろくうつくしけにそこらの  
月ころしつみたる人ともおほえ  
す心くるしけにめてたきことかき  
りなしとこはいかにして  
むそとものおほえ給はぬに  
宰相めのといまはかきりにこそ  
と見たてまつる気しきとかく  
ものおほえんやはたゝ御とも  
くしておはしませとこゑもを  
しますなぎたまふさまこと  
わりなり宰相の中将のもとへつけ

8ウ』

9オ』

たてまつる中納言いまはさりと  
とおもふことなくおほえつるもむな  
しく見なしたてまつる心地  
あるましきわさをして神仏  
のしわざなめりとなき人にそ  
ひふしてなきこかれたまふさ  
まあはれなりそこの月ころ  
そひたりつれとこゑをたに  
きかせたまはさりつるにいまはの  
をりしもいかはかりくるし  
かりつらん心さしの程を／＼ほし  
しりたりけるをいはんとおほし  
よりける御心の程とてもかくても  
人の御心をつくざせんとなり  
にける人かなとおもふもこの世には  
ちきりもおもはさりけるをのち  
の世にたにおなしはちすの露と  
むすはゝやとおほしまとふさまして  
おなし心にあはれをかはしまとのち  
きりにておはせましかはこの世にも  
とゝまり給はさらましと見たてま  
つる人／＼もいとをしき心地ともは  
もよをさるゝ心地そしける宰相  
中將はわか宮の五夜七夜の程はさふ  
らはせ給へとおほせられわれもさおほし

9ウ』

10オ』

10ウ』

つるにかくときゝ給にものおほえ  
給はんやは心もあはたゝしくうちにか  
う／＼とそうしてまかて給をきかせ  
給御心いまはさはよそながらたにき  
くましきにこそとみつせかはの  
わたりにわれもいそきいかまほしく  
あさからすおほしめさるゝに御そを  
ひきかつきておほとのもりぬさ  
い将の中将にはさりともしかてかざる  
事あらんたしかなることきかせよ  
とすく／＼しくおほせられなせとも  
一の宮の御こと一日の御文などのあは  
れさによそなりとてもつゆをろか  
に思なざるへしとおほさす  
宰相いそきおはして見きこえ給  
に中納言おなしさまにてそひふし  
給えりねいりたるやうにてしろく  
うつくしけなるを見きこえ給心地  
あまたあらむはらからにてたにかゝる  
かきりの御ありさまいまはとおもはん  
うれしきはおろかなるましきをかた  
身にまたなき御おもひともなれば  
ものもおほえすもしやと人／＼まも  
り給へといまはの御ありさましるき  
わさなればかなしとてもさてあるへ

11  
オ

きならねはおとはのやまのふもと  
にてけふりとなしたてまつり給に  
さらにもゑやり給はぬを人／＼思をく  
御ことあるにこそと申すいかさまにも  
一の御この御ことにてこそはあるらめ  
とおほせはしのひやかに御心しりの人  
このよしをそうし給にあるかなき  
かにておほとのもれるにまいりて  
このよしを申になく／＼いかなる  
へきこととおほせらるゝに御文  
などの候へきにこそと申にこの世  
にてありしかへりことをたにい  
すなりにしにうれしきついでに  
いふへきにこそとあはれにかなしくて  
なく／＼かゝせ給

11  
ウ

もえやらすむすはをらむけふりにも  
たちをくるへき思ならぬを  
みつせかはあふせありやといそきつる  
しての山地はわれもをくれし  
この世こそおもはずならねはちずはの  
うゑをく露はへたてさらなん  
あはれなることさま／＼かゝせ給てふん  
せさせ給てそのうゑにかゝせ給  
契をきしこゝろもあはれはなきあとの  
をくりこそやれむらさきの雲

12  
オ

12  
ウ

きさきの宮のせむしかふらせ給一の  
みやの御ことおほしめすにもなをあ  
かすおほさるれはいまひときはそふ  
へし一の宮の御はゝなるによりて  
そうくわう御宮とをくりたてま

13  
才

つらせ給ふたせんみやうよみあけたる  
をきゝ給宰相中将中納言などはいま一  
きわのかなしきそひてそゝろさむき  
まておほしけるにくちをしめて  
やみたまひにしかは中納言たゝはれ  
ゆえそかし人をもいたつらになし  
たてまつりぬとおそろしくなゝにゝ  
つけてもをんなの御ためはかたし  
けなき御すくせなりせめて思あまり  
そのことゝなき御契なれと中納言も  
御おくりし給へは宰相はあはれと見  
たまえるまゝにうちの御ふみを  
けむりのなかにうちいれてのち  
は雲とやなりまかてのほりたまひ  
にけるこのよしをうちきかせた  
まふにかのまほろしかことつけき  
かせ給けん御心もかきりあはれはまさ  
らせたまはしとおほしめさるゝ  
いまはいかにおほすともこの世には  
かひなき思なりかはかりうきこと

13  
ウ

を見るゝよにありてなにゝかはせん  
きしかたゆくさきもこれにまさる  
思我身にはあるへからすこのついでに  
かゝるうき世をおもひすてゝつみ  
ふかくもの思ひれてうせにし人をも  
いかてはちすの露となさんとおほ  
しめしけるにも一宮の物ゝ心し  
らせたまはんまてはあらまほしけれ  
とそれまてなからふへきならすと  
おほしつゝくるにこの世はたゝゆめ  
まほろしとのみおほしめしすてさせ  
たまふになをこの御心のやみにまよ  
ひぬへくおほしめすそくちをし  
かりける仏はさひしちんほうとこ  
そおほせられたれとおほししり  
なからひめみやの御かたへわたらせ給  
えれはこれも内侍督のことときか  
せたまえるかいみしくなかせ給  
える御氣しきいとゝつゝませ給えと  
御なみたは袖にあまるをせめて  
をしのこはせ給て内侍督はうせ侍ニ  
けるにくしといひなからよしな  
きことをさへしいたさせ給てそれに  
よりはゝ宮をもうしと思とり  
きこえて人もいたつらになりぬるに

14  
才

14  
ウ

15  
才

はうきことにあらずや見なれたりし  
われらをたにつねはものつゝまし  
けなりしをましてしらぬ人に

みえんとは思らんやその思にうせぬる

人に侍めりかた身にとゝめをきて侍

る人またも侍らぬを見をきかたくなと

おもひ侍御こにせさせ給てわか侍ら

さらむをりのかた身とも御らんせよ

七日すぎなはむかへとりてあつたて

まつらんとおほせられていみしけなる

御氣しきにいとゝみめみやも御袖し

ほるはかりになりぬるををのつから

ちかく候人は見きこえたてまつる

になみたとゝめかたかりけりとのゝ

うゑ内侍督の事とものたまふわかみや

むかえたてまつりて一日はかりおはし

けるきさいのくらひをくらせ給ける

ことなとこまかにきかせ給に中

納言はいかはかりあはれにおほす<sup>しめ</sup>らんと

おもふにわれをもうしとこそは

おほしめさるらめとおほすうゑはおほ

しめしたつ御ことも心もとなく

おほしめさるふ<sup>こ</sup>しみにあかなしと

いへと御いみもすゑつかたになりゆ

くに一みやにことつけたてまつりて

15  
ウ』

こちたきまで御とふらひありお  
ほやけさたなれはさはいへともよの中  
のひゝきにそありけるなにとつけ

てもめてたき人の御ありさま

にそありける中<sup>マツ</sup>納言はこのよには

ちきりをはせさりける人にをこ

かましくいたくなけかしとおほせ

とたくひなかりし御さまはなに

ならさらん人とてもおろかに思ふ

へかりし御ありさまかはほうしにも

ならまほしくなにとゝかへたる身

ともなくやと思ふはかりにとゝこほり

給えといまはのきはにしもあは

れをしらせたまはんの御氣しき

はこの世ならても思わするへきよし

なかりけりいかなる人を見るとき

つゆなくさむへ<sup>かた</sup>きはあるへきな

らすとのうゑいま<sup>マツ</sup>はしくおこか

ましくもありなにしにさて

はいつとなくおはすらんとかたゝ

にのたまふもことわりなり四十

九日にをのかおのゝゝあくかれたまふ

中納言のきのしのふをつくゝと

なかめいてゝいまははとおほす

かさしもなこりあはれになにと

17  
オ』

16  
ウ』

めとゝまる心地し給すそろなる  
もの思してをくりしいみ  
なとにさへこもりてなきこかれ  
たまふなときゝていまゝしくよし  
なきことなりみかとはなくくひ  
むなき物におもはれまいらせてと  
おほせとわれらか心あはせてし  
いてゝしことなれはえかくも物  
ものたまはすけにめてたかりし  
ありさまよの中の人このころ  
あはれなるさにそしける

印

〔四行分余白〕

〔白紙〕

御かとはつねならぬよとふかくおほ  
しとりつれはなにことも  
かすならす七日すぎぬれはよき  
日してわかみやむかえたてまつ  
りて見たてまつらせ給に御かゝみ  
のかけかはらぬものゆえはゝの御さ  
まも思いてられさせ給におもひす  
てつるよも心のやみはくるしかり

17  
ウ』

18  
ウ』

18  
オ』

けりといと心ほそくおほしめさる  
ひめ宮一ほんのみやになしたて  
まつらせ給てその御かたに一のみや  
はおはしませたてまつらせ給  
にかたゝのあはれにもおろかにおほ  
しめされんやはともすれはいた  
きあつかはせ給を中宮は心つきな  
くおほしめさるれとはゝのをは  
せはこそはめさましからめいまゝて  
まうけの君もをはしまさぬに  
ひめ宮の御ためゆくすゑたのもしく  
おほしめしをきつるもさすか  
にあはれにおほえさせ給へはおほし  
もはなたれすみたてまつりなと  
せさせ給にいまより気しきこ  
とにたゝうゑの御かほゝうつし  
とりて又はゝかたさえそひなへて  
ならぬさまを

まことにやむすひあはせし忍草  
なとあやにくに露けかるらん  
と思しられたまえとすきにし  
かたのこひしくかなしければ御  
めのとの宰相めしいてゝたれにもうし  
とのみおもはれきこえにしかは  
露のあはれもなさけもかけ給へ

19  
オ』

19  
ウ』

20  
オ』

しとおもはねと月ころなれ  
きこえしかはいまはと思ふは  
いとなんかなしかりけりすぎに  
し御心たかへすしたてまつりし  
をなき御心にはあはれとおほしけるを  
わか身にたにをこかましくしれ  
しき名をもなかし侍りぬるに  
思しる人も侍りぬへしよのつね  
のまことの契にかくまでおもひま  
はんはことわりのことに侍りなん  
心をはせん人は中くなどかあはれ  
おかけ給はさるへきと心やりてなん  
思侍とのたまふにこれにもなみたに  
むせみて御かへりことも申さす  
おはしためらひてあさましかりし  
御ありさまをあさからすおほし  
めしあつかひし御心さしはなに  
ことをいかにともおもひわかれ候はす  
かたしけなしとのみおもひ侍しかと  
もひころはかくておはしますにこそ  
思なくさめて侍りつるをいまより  
はなにゝいのちをかけ侍へきとそ  
のをりよりもきえぬへけなる  
気しきともあはれとみ給のちの御  
ことなとつれなくつらかりし御

20ウ

事ともなくこまかにいとなみ  
つるはありかたかりつる御心かなと  
宰相中将もおろかならずおほえ給  
御ゆえにかくはかなくなり給ぬる  
そかしとうらめしくおほすも  
それもさるへき契にこそとひこ  
ろの御心のあはれさにおほしめされ  
けりすそろにむなしくなして  
おほすらん中納言の御心も心くるしく  
あはれなり宰相もさてのみをは  
すへきならねはなくとまる人  
のことゝもさたしをき御はかへ  
まいりなとして中納言殿もろ  
ともにおいて給心地ともあへなくかな  
しとおろかなり御かとは月日  
のすきゆくも心もとなくいそかしくのみ  
おほしめすにとしもかへりぬれは  
又きしろふへき人やあるへきと  
おほしめせは二にて春宮にすへた  
てまつらせ給て宰相中将おほし  
めす御心あれはしたるになしあけつゝ  
人のそしりうらみもしらせ給はす  
大臣にて右大將かけたまひつこん  
中納言はよにをそれてまいり給はす  
またひんなき人とふかくおほし

21オ

21ウ

22オ

めしてしかはまいり給えともめ  
さすはしたなき事ともあるへけ  
れともいまはこの世にてもかくて  
もとおほしめせはおほしめし  
かへすいつとなくこもりゐたまへる

22  
ウ』

とのうゑはよしなかりけるわ  
さかなとくやしくおほえ給うち  
はよるひるねん仏にこゝろをいれ  
てもなをあちきなくおほしめせは  
おりるなんの御心あるへしうち  
の大将殿をめしよせてかうくなん  
おもふ一のみやのすこしこゝろつ  
きたまはんまてとねんすれは猶  
いと心もとなしまたきしろふ  
へき人やはあるくらゐゆつりたて  
まつりてんとなん思ふとおほせ  
らるゝにいかにおほしなるにかと  
おもふにかなしくてむけにいまた  
一のみやはいはけなくおはします  
うゑに御よいまたすゑにならせた  
まはぬにいかてかざる事と申  
給えはさらなりおほろけに思はん  
に人のそしりもありむつきの  
うゑなる人にゆつらむと思<sup>註五</sup>なんや  
心あさくもいはるゝかななとお

23  
オ』

ほせられてにわかには御くら  
ゐゆつりありて内大臣関白し  
たまふかたわらいたくいかゝとを  
ほしたれとこの一のみやをそこ  
よりほかにあはれとおもひたてまつ  
るへき人さらになしわれとて  
一のひとのすちにてあらすはこゝろ  
はあらめいまの御かとはひとへにき  
みにあつてんすおさなくて  
まつりことしたまはさらん程は  
一ほんのみやに申あはせてしむか  
おこかましからすひたうまつり  
ことなくよくくうしろみたて  
まつられよなんとけふあすもの  
へいかんする人のやうにいそかしけに  
おほせられをくことゝもたゝ内侍  
かみのゆかりと見ゆかくにわか御  
くにゆつりなとのあるをたれも  
あえなくめてたかりつる御よを  
とあさましきたみにいたるまで  
もてかなしみたてまつることかき  
りなし一ほんの宮にわれいかになり  
侍りぬともけうやうともおほしめして  
うちにはなれたてまつらせ給なはゝ  
ともちゝともきみひとりをたのみ

24  
オ』

23  
ウ』

たてまつるへき人にこそあめれ

むけにをさなからん程は女御たいにて

君せつしやうとよのまつりことはせ

させ給えかしなとそ申させ給さか

に御くわんありければそれへわた

らせ給て御さまかへんとおほし

めしたちてはいまははとおほしめすに

はさすかに一品宮の御こともとおほ

せは中宮いまは女院とそきこえ

給いま一とのたいめんなからんもくち

をしかりぬへければわたらせ給え

と申させ給てこの世はいくはく

侍ましければあらん程たにしはし

おこなゐせんとおもひ侍ををさなう

より見そめたてまつりしかはおるか

にも思たてまつらぬによしなき

ことひとつによりわれも人も心を

きてたてまつりにしもいまはくや

しく侍一ほんのみやおはしませは

むけにおほしめしすくらしと

なんおもひきこゆまたなくてそ

人のと申こともおほししることも

侍りなん一ほんのみやひとゝころ

おはしますもかきりすくなきこと

にて侍りうちのうゑをいまは我が

25才』

はりとも御ことも思て心をく事

なくて思はくゝみゝてまつり給なと

さまゝにあはれなることゝもをきこ

えあかしてあくる日そかへらせたまふ

いかにおほしなるにかとあはれに

おほさるそのつきの日一ほんの宮

くしたてまつりてきやうかうなり

ぬ見たてまつらせ給にかしこく

おほしすてつるよなれとないしのか

みにたゝそれとおほゆれば御めかき

くらされてかなしなとはかきり

なくおほしめさるゝ

はくくまむをやはひとりもそはすして

いかてかつるのこはそたつへき

とおほしめすにはいたきたてまつら

せ給御かほになみたのかゝれるをゆゝ

しくおほしめせは御めのとにうつし

きこえ給つ一ほんのみやにはあなか

しこ御めはなたせ給なたゝ我

かはりと御らんすへきなりとさまゝ

に申させ給ことゝもおほけれとも

いかてかなへての人のきくへき

ひくらしおりまくらしてかき

りあれはえとゝめたてまつり給はす

あかすかなしなから行幸なりぬ

26才』

26才』



一品宮はいかなるへき御ありさまにかと  
心もこゝろならずなく／＼かへらせ給  
けるあくる日さかへわたらせ給て  
山のさすめしおろして御くし

27才

おろさせ給えとおほしをきつる

をいまのせつしやうはその御けしき

みたてまつるにかなしく心もうき

はてぬる心地してかふりのひたいを

つちにつけていかなるみちにもをくれ

まいらすへからすわれもともにこそ

と申給をそこをたのみてこそ

いまたちの中なる人をうちすてゝ

思たちぬれうちのうへをこそわかるの

ともまたうせにしはゝのかはりとも

思なしてかまへてたいらかにて

みむとおもはるへけれうちすてゝ

われにくせんとおもわれはなか／＼

なきあとまてはとなんうらめし

かるへきと御めをしのこはせ給

てまたこないしのかみの御れう

にかならず御たうたてらるへし

うちはいふにかひなくおはします

そこにこそとふらひきこゆへけ

れなとおほせられをくことゝも

27ウ

まりてさすめしいれて御くし

おろさせ給こゝちのかなしさいまた

わかくさかりにめてたき御さまを

にわかにかくならせたまひぬる

いかはかりの御心ならんとよの人を

しみかなしみたてまつるさま

ことわりもすぎたり御くしをろ

させ給えれは人にもみえさせ給はて

仏の御まゑに御きやうよませ給て

ひもくれたれとも山のさすはあまり

かなしくおほえ給へはしはしやすらひて

うちなきてさふらひたまふに四の

まきのほ師品になりて一花一く

ないし一念すいきとゆるかにうち

あけてよませ給御こゑ雲の上に

すみのほるときこゆるにやう／＼

御こゑのとをくなるやうにておとも

せさせ給はす念仏せさせ給にやと

おもふにかうはしきかみち／＼てそら

にえもいはすめてたきかくのこゑ

かすかにきこゆ山のさすあやし

さにこれはきこしめすにやと申

給ことをともせさせ給はすなをあ

やしくて御しやうしをひき

28才

『

28ウ

』

29才

『

まさすなをいかなることそこゝ  
かしこみたてまつるにをはしまさす  
せつしやうとのはなきほれてかた  
すみにゐたまへるにかうゝとの  
たまへは物もおほえ給はすいか  
てかさることのあらむとみな人  
あきれまとひたりはてはから  
をたにとゝめすならせ給ぬるめ  
つらかにこそそくしんしやうふつ  
といふことありときけ又見き  
かさりつることをさにこそをはす  
めれとめてたうたうとき物からあへ  
なしともおろかなり一ほんの宮女  
院なときかせ給御こゝろともおろか  
ならんやは御さまのかはらせたまふ  
たにあさましくかなしと思つるに  
さなからもよにおはしますへし  
とおもひつれ御からをたに見す  
しらすなりぬる事とせつしやう  
殿はなきたまふさまことわり  
なりみたてまつる人もいとゝかな  
しさざりとあるへきことなら  
ねはのちの物さたにもかゝるた  
めしあらしかしと夢の心ち  
のみせさせ給せつしやう殿はいかさ

29  
ウ』

30  
オ』

まにも御いみにもこもらせ給け  
れとうちの御ことをおほせられ  
をきしもおそろしけれは

うちえまいり給てもかたし

けなくあはれなりし御心はえ

いかなるよにかなのめにおほゆへか

覧とこひしくかなしくゆめに

たにかてかきたかにみたてまつ

るへきとこゑもをしますすそ

おはしける一ほんのみやはうち

をみたてまつらせ給にも御おも

かけ御身にそひたる心地して

おなしをやと申なからあはれに

たくひなかりし御心の程を

この世ならてもあひみたてま

つるわざもかなとなけきこかれ

させ給えり女院も内侍督こと

ゆえにこそかたみに御心をかれ

たまひしかそのさきゝはいつれ

の御かたさふらひ給えとわれをは

すくれてえさらぬものにこそ

おほしたりしか一ほんのみやの

御ことを思きこえ給えはいかてか

おろかにおもはんおほせられし

御こともあはれなれはうちのうゑ

30  
ウ』

31  
オ』

の御事をはわか御こにもをとら  
す一ほんのみやとをなしくおもひは  
くゝみたてまつらせ給をもかけを  
とりとめ給へるを見るもいみ  
しくて

みとり子を見るたひことになしきを

つらきゆかりとなに思けん

と女ゐんはあやにくにたえぬ御なみた  
なりとし月すくる程にうちのおへ

七にならせ給程うつくしくこ院

の御かほゝうつしとりてはゝのおも

かけにもたかはねはこの世の人とも

みたまはす関白殿よのまつりこと

めてたくあめのしたにあやしきた

みまでうけられめてきたためしに

ひきけりさきのをとゝはよろつ

めのまへにかはることをみてくち

をしとおほしけれともことわり

のことなれはものもいはて[そ]す

くし給けるうちのうへは一ほん

のみやをはゝとおほしめし[を]とゝに

なにことをもおほせあはせられて

あさましきまでおもひいてたまふ

さまためしなき程なり三月

廿日あたり南殿のさくらさかりなる

31 ウ

にせいりやう殿のみなみをもてに  
花御覧するついでに御あそひあり  
女はらのなかには中納言のすけ宰相  
こ弁侍従みやうふなとおのく心  
をつくしたる物ゝねともなり

うちも御みゝいつかしくおとゝさへ

おはすればてふれにくしとやす

らえともかきたまふに殿ゝ左大将

御この頭中将中宮すけなとをはし

ます右大将のをとゝよむかしの人く

のこともおのくとりくによこふえ

しや[そ]のふゑなとふきたまふ

いとおもしろきよの御あそひなり

それにつけてもおとゝはむかし

こひしくおほしいてゝうちし

ほたれたまふしはてゝいつる程

のろくともおのくめてたし女は

うのさうそくほそなかなとし

たるへしうちのうへ御くしのう

つくしけに御ゐたけはかりにて

はしりあそはせたまふに一ほん

のみやの御かたにおはしましたるに

みやあなうれしと御らんして

あはれこないしのかみにもよく

にたまえるかなとおほせらるれば

32 オ

32 ウ

33 オ

33 ウ

こゐんの御よに候し中納言のすけ  
うちなきてされはこそこゐん  
も御身みみもうせたまひにしかなど  
おほさみなき御みゝにきこし  
めししりて御めになみたをう  
けておはしまたもあはれに御ら  
んして御袖もしほれぬめり  
おとゝのまいりたまえるに  
はしりおはしてあのような内侍  
督とはたれそとおほせらるれば  
それは御うゑの御はゝよと申給えは  
さてみやはたれそとおほせられ  
たるさまあはれにめてたしそれも  
はゝよと申給えはあらぬよあねそ  
かし内侍督こそはゝよとおほせ  
られてなみたをうけ給へる御さ  
まよく／＼申きかする人あるへし  
とあはれにてうちなきたまひぬ  
御くしかきなてゝ八月に御けん  
ふくあるへしそひふしにはを  
とゝのひめ君まいりたまふへしと  
いまよりのゝしるめりそちの  
中納言といひしはいまの大臣をかし  
おとゝの御しうとよおとゝはうち  
につとつきまいらせてをはすれば

34  
オ』

そのまゝにそまつりことはあり  
けるをとゝのきたのまん所  
は二の殿とてつとさふらひたまふ  
きんたち七人をはします  
なにこともさきのよの契と御心  
はへともさへめてたくいはれ給  
へしおとゝは一ほんのみやと申  
あはせてめてたきまつりこと  
なりとみまてた註六いわれめてた  
かりけるとかや

35  
オ』

これを御らんせ人むは  
念仏申させ給へし

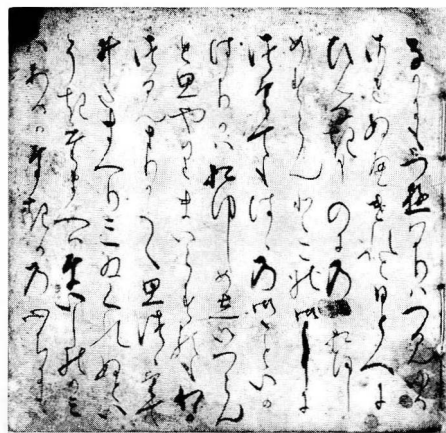
かならず／＼

〔白紙〕

35  
ウ』

34  
ウ』

註一 「は」の上に「い」とある（三オ―11）。  
註二 「の」の上に「し」とある（二二オ―9）。  
註三 「や」の上に「に」とある（二二オ―11）。  
註四 「こ」の上に「に」か。又は見せ消か（二三ウ―3）。  
註五 判読しがたい。「な」は試案（二三ウ―8）。  
註六 「き」の上に「ま」か（三五ウ―4）。



口絵1 「雫に濁る物語」  
第2丁オ本文冒頭



口絵2 「雫に濁る物語」  
第35丁ウ本文最終丁

